

報道関係者各位

## 「東京ビエンナーレ2020」開催概要のお知らせ



この夏、国際芸術祭「東京ビエンナーレ2020」を開催いたします。

新型コロナウイルスの感染拡大が終息を見せない中、2020年東京大会の延期という衝撃的なニュースが流れました。オリンピックなき東京、新型コロナウイルス感染症に直面する東京で、私たちにできることは何か。多くの人々が期待をしていた予定調和が崩れてしまった中、アートだからこそ、この状況に向き合わなければなりません。「東京ビエンナーレ2020」は、この夏に向けて準備してきた構想に立ち、数多くの「見なれぬ景色」を提示し、皆さんに感じていただきたいと考えています。

開催場所となるのは、歴史的文化的色濃く残る都心の北東エリア。会場には、公共空間や学校施設、寺院会堂、歴史的建造物、公開空地などを利用します。作品は日常の中に現れ、まちの様々な場所に点在します。アート作品を鑑賞することでまちの歴史文化に触れたり、作品を体験することで身近にいる見知らぬ誰かの存在を想像す

ることができたり、自分で何かやってみようという創造的な活動が生まれる。一つひとつは小さな動きかもしれませんが、そうした様々なアクションの積み重ねが、新しい創造的な未来を作るのだと私たちは信じています。

参加する60組以上の作家やクリエイターたちは、現代アートや建築、ファッション、デザインなどというジャンルに縛られず、領域横断的に「東京」というまちやそこに住む人たちと深く関わり作品制作を行います。

本芸術祭の主体となるのは、私たち市民です。東京ビエンナーレは市民の皆さんとともに発足した市民委員会から始まりました。市民主導の完全ボトムアップ型の芸術祭として、芸術祭自体の新しいフレームや仕組みの実験の場となります。

まちの創造力が目を覚まし、数々の「見なれぬ景色」が広がっていく。

「東京ビエンナーレ2020」、始動します。

※本芸術祭開催にあたりましては、新型コロナウイルス感染症の情報に細心の注意を払い、専門家の意見を仰ぎながら、具体的な感染防疫対策をしております。会期・会場等は変更になる場合もございます。

### テーマ

## 東京ビエンナーレ2020

# 見なれぬ景色へ

— 純粹 × 切実 × 逸脱 —

東京の街の中で何かが起こること、それを起こすのはアートだ、ということを知覚するキャッチ・フレーズが「見なれぬ景色へ」です。

すでに存在している都市の街並みに思わぬ仕掛けを突きつけて、あの景色の変化は何だ？と思わせるのはアーティストの仕事。また意識もせずになじんできた通り道に違和感を感じたら、それがアートの仕業だったということも起きるでしょう。日常の空間や景色を新しい目で見て未来へつなぐ、今からやり直せることを発見する。この厳しい夏だからこそと、アートへの強い願いをこめています。

東京ビエンナーレ2020 総合ディレクター  
小池一子（クリエイティブディレクター）

■ 開催概要

名称	東京ビエンナーレ2020
東京ビエンナーレ2020 テーマ	見なれぬ景色へ — 純粹×切実×逸脱 —
期間	2020年7月12日（日）～ 9月6日（日）57日間
主催	一般社団法人東京ビエンナーレ
後援	千代田区、文京区、一般社団法人千代田区観光協会
助成	文化庁 令和元年度日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド
協賛	株式会社 大丸松坂屋百貨店 日本ペイント株式会社
特別協力	3331 Arts Chiyoda、一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN
会場	東京都心北東エリア（千代田区、中央区、文京区、台東区の4区にまたがるエリア） 歴史的建築物、公共空間、学校、店舗屋上、遊休化した建物等（屋内外問わず）
チケット料金	チケット情報の発表は2020年5月ごろを予定
総合ディレクター	中村政人（アーティスト）、小池一子（クリエイティブディレクター）
プロジェクトプロデューサー	中西 忍（建築家、日本科学未来館副館長）
クリエイティブディレクター	佐藤直樹（アートディレクター、デザイナー、画家）
リエゾンディレクター	橋本樹宜（協永ソフトエンジニアリング株式会社代表取締役）
ソーシャルプロジェクト ディレクター	伊藤達矢（東京藝術大学特任准教授） 佐藤直樹（アートディレクター、デザイナー、画家） 西田 司（建築家、オンデザインパートナーズ代表） 福住 廉（美術評論家） 楠見 清（美術編集者／評論家、首都大学東京准教授） 毛利嘉孝（社会学者、東京藝術大学教授）

※会期・会場等は変更になる場合もございます。（2020/3/27現在）

東京ビエンナーレ2020参加作家を発表

「東京ビエンナーレ2020」は、今夏の芸術祭に参加する作家やクリエイター29組と、公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」で選ばれた国内の20組、世界にむけて公募し約1,500人の応募の中から選ばれた海外からの12組を第一弾の参加作家

として発表します。まちに入り込み、「東京」を舞台にアクションを起こすことで、歴史や文化、多様な価値観に光を当てる60以上のアートプロジェクトを展開します。

■ アートプロジェクト  
作家/クリエイター紹介  
(50音順)

池田晶紀、伊藤ガビン、宇川直宏、川村亘平斎+宮本武典、グランドレベル（田中元子+大西正紀）、栗原良彰、佐藤直樹、竹田昌義+中田理恵、高山明、立花文穂、椿昇、津村耕佑、遠山正道、内藤礼、中村政人、西尾美也、西原珉、西村雄輔、長谷川逸子、島山直哉、藤浩志、宮永愛子、村山修二郎、柳井信乃、山縣良和、山崎亮、リー智子、commandN

■ 公募プロジェクト  
「ソーシャルダイブ」  
作家/クリエイター紹介  
(50音順)

鶯谷ベル・エポック、久村卓、佐藤史治+原口寛子、鈴木真悟、スタジオバッテリー、セカイ+一條/村上/アキナイガーデン、高畑早苗 & Creative Kids Club 人形町、太湯雅晴、2.5 architects（森藤文華+葛沁芸）、東京アルプス、ときめき運送営業所、藤原佳恵、Placy、BKY+銭湯山車巡行部、Hogalee、MMIX Lab、門馬美喜、野堂、山中カメラ

フィオナ・アムンセン（ニュージーランド）、ロシリス・ガヒード（ブラジル）、ペドロ・カルネイロ・シルバ（ブラジル）、ダフナ・タルモン（イスラエル）、クレイ・チェン（シンガポール）、ティン・ティン・チェン（台湾）、陳飛豪 フェイハオ・チェン（台湾）、マルコ・パロッチ（イタリア）、アリーナ&ジェフ・ブライアミス（アメリカ）、ケレム・オザン・ベイラクタル&ブスラ・トゥンク（トルコ）、マイケル・ホーンブロー（ニュージーランド）、ヒドゥル・エライザ・ヨンスドットティル（アイスランド）

■ 作家作品例



山縣良和 《Small Mountain in Tokyo》  
2019



高山明 《マクドナルドラジオ大学》 2017  
撮影：蓮沼昌宏



内藤礼 《無題》 2009 (2008-)   
神奈川県立近代美術館鎌倉  
撮影：畠山直哉

## 東京ビエンナーレ2020のWebサイトをオープン

URL  
<https://tb2020.jp>

「東京ビエンナーレ2020」は公式ウェブサイトオープンし、参加作家やクリエイターが展開予定のアートプロジェクトを公開しました。また、これまで開催したイベント「Why Tokyo Biennale? 構想展」(2018)や「HOW TOKYO BIENNALE? 計画展」(2019)をアーカイブ化し、芸術祭の立ち上げプロセスを映像を交えて収録しています。当サイトは、今後も会場やプログラムなど本番に向けてさらなるリニューアルを予定しています。

### 東京ビエンナーレ2020 総合ディレクター



#### 中村政人 アーティスト

1963年秋田県大館市生まれ。アーティスト。東京藝術大学絵画科教授。「アート×コミュニティ×産業」の新たな繋がりを生み出すアートプロジェクトを進める社会派アーティスト。2001年第49回ヴェネツィア・ビエンナーレ、日本館に出品。マクドナルド社のCIを使ったインスタレーション作品が世界的注目を集める。1993年「The Ginburart」(銀座)、1994年の「新宿少年アート」(歌舞伎町)でのゲリラ型ストリートアート展。1997年からアーティストイニシアティブコマンドNを主宰。秋葉原電気街を舞台に行なわれた国際ビデオアート展「秋葉原TV」(1999~2000)「ヒミング」(富山県氷見市)、「ゼロダテ」(秋田県大館市)など、地域コミュニティの新しい場をつくり出すアートプロジェクトを多数展開。アーティストイニシアティブ コマンドN (1997~) とアーツ千代田 3331 (2010~) の活動において10カ所の拠点、740本のアートプロジェクト、3,100本のイベントをつくり、2,000名のアーティストと協働、延べ180名のコアスタッフ、約1,350名のスタッフ等と協働する。現在、その多くの表現活動から東京の文化芸術資源を開拓する「東京ビエンナーレ」を2020年夏から展開することに挑戦している。



#### 小池一子 クリエイティブディレクター

1980年「無印良品」創設に携わり、以来アドバイザーボードを務める。ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館「少女都市」(2000年)、「横尾忠則 十和田ロマン展 POP IT ALL」(2017年、十和田市現代美術館)などの展覧会の企画、ディレクションを手がける。1983年にオルタナティブ・スペース「佐賀町エキジビット・スペース」を創設・主宰し、多くの現代美術家を国内外に紹介(〜2000年)。近著に『イッセイさんはどこから来たの? 三宅一生の人と仕事』(2017年、HeHe)他。2019年、文化庁メディア芸術祭功労賞受賞。武蔵野美術大学名誉教授。

Photo: Taishi Hirokawa

別添資料：東京ビエンナーレ2020 テーマについて

## 純粹×切実×逸脱

布に絵の具を塗ったものや、鉄の塊が「芸術」と言われる所以は、どんな点にあるのだろうか？

一般的に有名な絵画や彫刻、オペラやダンスのような崇高で、なにかとても価値が高いものだったり、誰にも真似できない行為だったり「芸術」と言う。では何故そう言われるのか？ 「芸術」と「芸術ではないもの」の違いはどこにあるのだろうか？ しかも、それをつくり出す人を「芸術家」や「アーティスト」と特別な言い方をする。いったい、どんなことをできる人がそう呼ばれるのか？ 特別な言い方をしなくてはならない理由は、どこにあるのだろうか？

それらのことを纏くキーワードを3つ挙げる。

1つ目は「純粹芸術」「ファインアート」と言われる場合の「純粹」である。多様な創造力の中でも、人間の尊厳を感じる崇高な精神性や豊かな心を「純粹」という。大衆的、商業的、作為的な行為とは対照的であり、その純度が高ければ高いほど研ぎ澄まされた人間力を感じる。

2つ目は、極限的で限界的な状況に追い込まれたときや、どうしようもなく行わなければならないときの「切実」さである。生きていくことと同様に、つくらなければならない行為や表現の質を言う。例えば、震災で家や家族、お金も失い、何もかもなくなったときに、生きていくためには始める活動はとて「切実」である。

3つ目は、この「純粹」な精神力を抱き、かつ「切実」な表現活動をし続けている人がつくり出す様々なものや表現活動が、それまでの状態から他に類を見ない「逸脱」した存在となったときである。際立った表現でなかったものが、いつの間にか変化しはじめ、あるとき「逸脱」する存在感を獲得する。この逸脱の創造プロセスが重要である。

「純粹」で「切実」な行為や表現が「逸脱」した存在となったとき、私は、そこに「芸術」としか言いようのない状態を感じ取る。

何気なく紙に鉛筆でさらさらと描いたものに「芸術」を感じる時もある。何十年もかけてつくりだした壮大な建築でもまったく感じない場合もある。それは、私論だがこの「純粹」「切実」「逸脱」という3つのどれかが欠けているからである。いくら高価な材料でつくったとしても「純粹」性を感じなくては「芸術」とは言えない。「切実」な表現でないものは、いかに技術的に優れていても、人間的な魅力を喚起しない。「逸脱」していない状態は、いかに「純粹」で「切実」な表現であったとしても普通の表現としか感じ取れない。

この「純粹」×「切実」×「逸脱」という3つの言葉と、その言葉がクロスすることで生み出される概念を、「東京ビエンナーレ」という新しい構想のフレームの中へ投げかけたい。関東大震災、第二次大戦の空襲で焼け野原になった東京、東日本大震災で起こった福島第一原子力発電所事故。「破壊と創造」が繰り返される日本において、「人間と物質」が生み出して来た様々な仕組みや社会環境を、私という「個」と私たちという「全体」の中にある社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を構築するプロセスを通して創造していきたい。そのためにも、ここで働き暮らす「私」の中にある「純粹」×「切実」×「逸脱」という“身体的文化因子”が、「私たち」へと一斉に進化するための起因となること。それが新たに創り出す「東京ビエンナーレ」である。別の言い方をすると東京ビエンナーレの各プロジェクトが「私」の内なる壁を打ち破り“一点突破全面展開”する契機となり、膠着している東京に新たなメタポリズムを与えること。そして多様な「私たち」の市民目線から押しつけや享受するだけのものではない、「自分たちの文化」を「自分たちの場所」で、創発的に組成していくこと。それが「私たち」東京ビエンナーレ市民委員会が考える、これからの時代の新しい「東京ビエンナーレ」である。

東京ビエンナーレ2020 総合ディレクター  
中村政人（アーティスト）